

北京で極秘裏に開かれていたことが事後公表された中国共産党十全大会は、林彪批判と対ソ非難の壮烈な一大キャンペーンに終始した感があったが、新しい最高リーダーシップのなかで、王洪文氏が副主席として毛沢東主席、周恩来首相に次ぐ地位にランクされたことは、世界を驚かせた。しかも彼は大会の席上、党規約改正報告という大役を演じたのだから、巷間、王洪文NO・3説がはやされたのは無理のないことである。

●外交時評

王洪文NO・3説への疑問

中嶋嶺雄(東京外国語大学助教授)



もとより私も、王洪文副主席が中国の次代を担うリーダーの一人として脚光を浴びている事実を否定はしないが、彼が毛沢東主席、周恩来副主席・首相に次ぐ地位を固めたものとはどうしても思えない。

第一に指摘すべきその最大の理由は、中国の政治情勢は、今回の十全大会の開催にもかかわらず、なおきわめて流動的かつ不確定であると考ええるからにはかならない。そして十全体制とは、要するに、毛沢東以後の時代を、中国の指

導層自身がそれぞれさまざまな角度から意識した、過渡的な政治権力体制だと評価するからである。

このような状況のなかで、第二には、次のような推測もまた可能であろう。つまり、王洪文氏は中央委員からいっきよに党副主席に抜擢され、党規約改正報告という重要任務を担ったが後継者問題がからんだ林彪事件を教訓とする中国共産党としては、もしもこの任務を他の指導者(たとえば張春橋氏もしくは姚文元氏)が担

った場合に考えられる決定的なNO・3としての内外の評価を避けるために、あえて「無色」の王洪文氏を登用したとも考えられることである。

第三の根拠としては、王洪文氏はたしかに上海の労働者出身の「文革グループ」の一人にはちがいないが、たとえば姚文元のように、派閥的な含意のない人物であり、急進派からも穏健派からも、また党官僚・行政官僚からも軍官僚からも、ひとしく推挙され得る人材であるらしく、しかも「老・壮・青」の団結による人事の

若返りを強調したい中国指導部にとっては、まったく傷のついていない「プリンス」だと思われることである。

したがって第四には、彼の今回の躍進は、あの激烈きわまる党中央において、彼みずからの政治的基盤と実力によって実現したとは思われず、このことは、彼の党規約改正報告自身、七全大会の劉少奇報告、八全大会の鄧小平報告(九全大会では党規約改正報告なし)のように一定の思想性と政治性に基づいて主体的に問題を提起したものでなかったことを考慮してみても推測できよう。

そして第五には、いかに「プリンス」であっても、一たびこのような地位につくや、さまざまな政治的試練が待ち受けるであろうし、今日の中国政治の厳しさからして、このように若くして躍進した指導者の将来は、これまでの過程に照らしてみてもきわめて不安定だと見ねばなるまい。八全大会の鄧小平や、七全大会の劉少奇でさえ、こうした試練のなかで失墜していたのであった。

私は、今回の一連の人事では、あえて副主席にはならなかったとはいえ、党大会主席団秘書長をつとめて大会をとりまとめた(九全大会では周恩来首相がこの役をつとめた)張春橋中央政治局常務委員の着実な台頭に、より多く注目すべきではないか——と考えている。